静岡大学理学部同窓会会報
NO.18
発行所
静岡大学理学部同窓会
静岡市大谷836
静岡大学理学部内
℡ 054-237-1111 ㊥
会長 赤池大樹

改革の中で

副会長 平松晴二

同窓生の皆様明けましておめでとうございます。

長引く不況と構造改革の嵐が吹きすさぶなかで、新たな年を迎えることとなりました。大学の法人化が叫ばれる中で、静岡大学は浜松医科大学との統合を見据えて協議の段階に入っています。私も教育という世界に身を置いて早くも三十数年が過ぎてしまいました。教育界も構造改革が叫ばれている昨今ですが、なかなか簡単に改革が進んでいるようには思えないところがあります。

私はここ三年ほど定時制高校に身を置き、まさに今取りざたされているようなすぐ切れる子供や、協調性のない子供、うまく学校に適応できない子供たちと接してきました。そんな中でつくづく自分の力の無力さを感じています。何でもできると思ってやってきた自信が簡単に崩れていく現実を何度も目の当たりにしてきました。教育は学校だけで行われるものではないことも実感してきました。家庭の協力なしには何もできません。どちらかといえば家庭の教育力があればこんな問題は起こっていないのかもしれません。例えば、不登校の生徒はやっぱり一般的に考えればわがままです。したがって今の学校制度の中ではやっぱり落ちこぼれてしまいます。それでは学校の仕組みを変えたら救えるのかと考えるとそれでは救えないだろうと思います。わがままで協調性のない子供はわがままを直し協調性を身につけさせる必要があります。だから強制力も必要でその面では今の管理教育は必要だと思われます。ただ、今の学校の中でやっているような画一的な方法だけではうまくいかないと思います。新しいことをやれば何とかなるという考えは捨て、マニュアルにない手作りの対応が求められているのではないでしょうか。戦後の混乱期の中で作り出されたつづり方教育のように一人一人の心に問いかけていく手作りの教育が今求められているのではないでしょうか。私を含めて今の教育に携わる者は何とかしてマニュアルを作り上げようと考えすぎているのではないでしょうか。実際、教育の効率を上げていくためにはマニュアルは必要なものだと思いますが、反面マニュアルに無いことは何もできないという結果を生んでしまいがちです。マニュアルに頼らない手作りの教育を家庭でも学校でも考えていくことが必要だと思います。この辺に本当の教育改革があるのではないでしょうか。思いやりがあり、豊かな心を持つ子供を育てることは教える側の一人一人が自分の個性で教育できる場面とマニュアルどおりの効率よい教育場面が組み合わさったときに初めて可能になるものではないでしょうか。同窓会の活動もそういった意味で従来の活動に加えて、昨年はコンサート活動も支援をさせていただきました。何でもできるわけではありませんがこれからも何ができるかを考えながらゆっくりと手作りの歩みを続けていきたいと考えています。同窓生の皆さんのご支援をよろしくお願いいたします。

理学部長二期目の最後の年を迎え、これが最後のご挨拶になろうかと思いますが、皆様に目まぐるしい変化の中での大学の近況めいたことを、もう一度かい摘んでお知らせしておきたいと思います。

国立大学の独法化はもはや避けられない状況になってきまして、平成十五年一月あたりの通常国会で国立大学法人（仮称）が承認されますと、平成十六年四月から法人化が施行されることになります。しかし、大詰めの昨今の議論では、急に話が変わってきて、教職員は非公務員とすることが本決まりの様な話になっています。（この拙文が出る頃には、もっとはっきりするでしょうが）。教官だけでなく事務官までが非公務員となりますと、いろいろな問題が出てきます。かつての有馬文部大臣が法人化に踏み切ったのも、教職員は「国家公務員」とすることが条件でしたし、その後の国立大学協会もここだけは譲れないとして頑張ってきたはずなのですが、どうも形勢はおかしな方に向かいつつあるようです。

また、大学の最高決定者は学長ではない様な制度にするとか、学長の選出方法も大学人の総意で決めるのではなく、もっと別の（民間人が関与した）方式にもっていこうとするモーメントがかなり強まってきました。

国立大学の行方についての雑感

理学部長 天岸祥光

産業界の圧力が相当あるのだろうと思いますが、そこを私はかなり心配しています。これからは、工学部ほどではないにしても、理学部も産業界と連携して研究を進めていく分野や研究者が大幅に増加するだろうとは思っています。現に、理学部でも特許を申請する研究者が増えてきましたし、民間企業から研究費を寄付してもらうケースも急増しています。そういった連携はこれからの理学部が評価を受ける際も重要なファクターの一つになるでしょう。

ただ私が心配しているのは、企業方式を学問・教育の府に持ち込みすぎる事です。景気が一向によくならないために、政府も大学の知的資産を短絡的に産業界に引き出そうとしています。大学を活性化するという合い言葉の下に、競争原理と効率主義が必要以上に叫ばれ、大学を会社の経営感覚で運営させようとする圧力が働き始めているのです。

こんな状況を暗示するニュースが時折新聞紙上などのメディアに登場することはとっくにお気づきでしょうが、根っこは相当太くなっています。そんな中で我が理学部の行方を見誤らないようにしていかなければなりません。そのためにも今後ますます理学部同窓会との絆を強めていきたいと思っていますし、今後の理学部に対する忌憚のないご意見をお寄せいただけたらと思います。

「生物地球環境科学科（生物学教室）の主なる現況」

石川勝利

新しい世紀は「バイオの時代」といわれています。このことは、いずれも理学部の中で生物学に関して教育研究を担うもの、そして生物学を理学部で共に学んで巣立った同窓生の皆さんとも、我々が出番である時代を意味します。

さて、当生物学教室は平成八年度に大きな変革を致しました。旧来の生物学科と地球科学科とが一緒になり生物地球環境科学科として、新しい時代に対応するために衣替えしたからです。それに伴い大学院は工学研究科と一緒になって理工学研究科博士前期課程生物地球環境科学専攻となり、さらに後期課程環境科学専攻を発足しました。本教室に関する現況について報告したいと思います。改組に伴い十二人に新しいスタッフを加えて現在十七人に増強した教官陣容です。以来教育研究を効率的に進めるために、グループ制の導入を図るなど一層の発展をしてきています。なお、太田吉彦先生は平成十一年三月にご定年退官なされました。

まず教育研究の環境面での朗報を一つお届けしたいと思います。本学で最も狭隘な環境で教育研究を強いられてきました理学部は念願かない、七階建ての新棟（名称は、学内共同教育研究施設としての機器分析センター二階分を取り込んだ「総合研究棟」）をこの三月末までに完成する運びとなりました（写真参照）。場所は、理学部A棟と図書館前との間になります。最上階の七階（植物生態学の増澤武弘・木部剛研究室、植物生理学の塩井祐三・天野豊己研究室、分子生物学の丑丸敬史研究室）と、六階（分子細胞生物学の石川勝利・徳元俊伸研究室、分子生理学の山田貞平研究室、分子遺伝学の山内清志研究室、微生物生化学の藤原健智研究室）に当教室のスタッフの半数以上が入ります。他方、従来までの理学部A棟六階に、分子内分泌学の田中滋康・鈴木雅一研究室、細胞生物学の塩尻信義研究室、発生生物学の野口基子研究室、神経行動学の竹内浩昭研究室、植物発生学の調子昭一研究室そして事務室に鳥井　牧さんが、他にA棟五階や共通教育（旧教養部）C棟の一部にも実験室があります。なお、学内共同教育研究施設として「遺伝子実験施設」が共通教育（旧教養部）CとD棟の間に既に設置（平成十年度）されていますので、生物学に関する教育研究環境は一層整備充実され、各位は気分一新更なる飛躍をと意気込んでいます。

学生の受け入れに関しても触れておきたい。学科は入学定員九十名で、二年次に学生の志望に従い二つのコース（生物学系と地球科学系）に分かれますが、生物学系には毎年五十名余の学生が在籍しています。学部との一貫教育体制として位置づけた博士前期課程の専攻の生物学系には、この三年間二十名程の学生が毎年入学しています。また、拡充された博士後期課程の生物学系に関しては、本年度末までに博士（理学）号を取得し巣立った者が八名を数えています。これら着実な成果を踏まえ、従前からの特色ある教育システムに加えて、研究面でも「二十一世紀の卓越した教育研究拠点」の一つになるべく益々の前進を図ろうとしています。

以上、振り返って実に目まぐるしく推移してきています。いま国立大学は平成十六年からの「法人化」を見据え、非常に大きな転機に来ています。このような状況にあって変わらなければならない生物学教室を目指すうえで、重要な柱の一つである同窓会とは一層の連携を深めていきたいものです。

職場紹介

株式会社アルバック

片桐弘明
（物理学科・理工学研究科）

私は、三年前の九九年三月に物理学専攻を修了して以来、株式会社アルバックの研究所に勤務しています。

アルバックというとまったく聞いたことがないかもしれませんが、入社した当時は、日本真空技術株式会社という社名でした。

これでも聞いたことがないという方がいると思いますが、私が在籍していた研究室は、天岸教授の指導の元、プラズマの研究で真空を扱っており、研究室には〝日本真空技術〟という文字のついた計測器や部品がたくさんありました。

設備メーカーである当社は、海外、主にアジアにもその市場を持っており、海外では、ＵＬＶＡＣ(アルバック）という名前のほうがその筋には有名でした。そこで、昨年七月に、日本だけではなく世界に通用する意味もこめて、現社名のアルバックに生まれ変わりました。

アルバックという社名は、〝究極の真空〟を英語であらわした〝Ultimate in Vacuum〟からきています。主な業務内容は旧社名にもあるとおり、真空技術を使った生産装置の製作や生産工程のプロセス開発、そして、それらに使用する計測器や真空ポンプなどのコンポーネントの製作・販売です。

真空技術を使った生産装置でいったい何を作るかというと、液晶ディスプレイ・ＰＤＰ・ＨＤ・磁気テープ・半導体・光ディスク・スナック菓子の袋の裏…などなど、私たちの身の回りにあるものです。そう、あなたの家には必ず〝made in ULVAC〟があるはずです。

最終製品として市場には出回っていないため決して表には出てこない、しかし、裏方で世の中を、それも、最先端で支えています。

その中でも、私の業務は、主に電子部品関係の研究開発です。ただがむしゃらに非現実的な最先端を追い求めるのではなく、今現在の技術、将来の技術、さらにその先につなげるための技術の開発に日々励んでいます。そこで役に立っているのが、静岡大学で学んだ六年間の知識と経験ではないでしょうか。普通ではなじみの浅い〝真空〟という言葉に、そして〝真空〟そのものに日常的に接することができました。そして、これからもずっと、真空を片手に物理学の世界をさまよい続けていく、そんな職場です。

〈静岡大学理学部同窓会会計報告〉

一般会計　2002年3月31日

収入の部	
前年度繰越金	4,677,373
年会費・寄付	1,780,000
名簿代	30,000
受取利息等	44,058
収入の部合計	6,531,431
支出の部	
通信費	316,100
印刷費	760,410
備品・事務用品費	274,000
会議費等	30,005
積立金	1,700,000
支出の部合計	3,377,165
差引残高	3,154,266

無題

数学科　高　信敏

早、卒業して二十二年、今は、数学を生業として、金沢大学で確率論の研究、並びに数学全般の教育をしています。

しかし、最初に興味をもったのは数論なんですね。何せ、私はかのRiemannと同じ誕生日なのです。(月日を知りたい方は、例えば、岩波の数学辞典を調べてみて下さい)。そのせいもあって、二年生の夏休みには、Hardy-Wrightの初等数論の本(洋書です。最近、和訳も出ていますが、読むならば原書デス！)を個人的に読んでいました。この本にはたくさんの定理が載っていて、その内の主定理の一つである素数定理「xを越えない素数の個数をπ(x)としたとき、漸近的にπ(x)～x/log x or π(x)～ int_2^x dt/log t である」を得意げに、近藤先生に喋ったら、後者のasymptotic はロピタルの定理より前者から直ぐに従いますね、と即座に指摘されギャフンとなった苦い思い出があります。

四年生になって、逆にギャフンと云わせてやろうと、近藤先生に付いて先生の専門である確率論を勉強し始め、それ以来今日までこの分野の研究を続けているわけです。

この二、三年は、数論と関連した「二つの整数が互いに素である確率が $6/\pi^2$」であることを確率論的立場から見直し、そしてその奥に潜む極限定理を示そうと苦心しています。が、後Riemannであるところの私には、必ずやこの問題が解けると信じて、頑張っています。第十二回卒

同窓生の窓

静岡大学から得たもの

物理学科　松谷茂樹

私は八六年に学科を八八年に修士を卒業し、以来東京近郊のメーカーで働きながら余暇に数理物理の研究を続けてきました。出版論文も三五を越え、最近は、海外に研究仲間もできました。

東京近郊の学生には、研究の最前線が身近にあり「大木の何処に葉をつければ、喝采を受けるか」という情報も溢れています。同時に最前線の研究をいち早く飲み込み、吐き出せない者は敗者とされる厳しさもあるのですが。

それに比べ私の時代の静大は全くわさわさしていませんでした。「何とかなる」という雰囲気と共に、牧歌的で、世界の中心とは程遠い感じでした。それに焦りも感じたものですが、時間がゆっくりと流れている分「自分とは何か」等々を十分に考えられたと思っています。例えば、ピカソの絵を見るのは、技術を盗むためではなく、唯見たいから見るのだと。静大からはいち早く最前線に送り込まれるための訓練ではないものを得ました。それが今、血となっていると強く感じています。

第十八回卒

遅れて来た中年

生物学科　清水　謙

子供達の年齢が自分の大学生活を送った年齢になり、ふと静岡での四年間を振り返って見ると、この四半世紀自分は成長したのかと考えさせられてしまう。学生時代にターゲットにした大人らしい大人の像からはほど遠い、つまりちゃんとした大人になりそこね、歳だけを重ねたということなのだが、その訳はどうも学生時代の「こだわり」を面々と引きずってきたことによる物だとようやく解ってきた。行動はしないが心情的な政治へのこだわり、相矛盾する物質的な豊かさへのあこがれ、そんな物を引きずりつつ大人の仮面を被って暮らして来たようだ。図塊の世代の尻尾に位置する諸兄、「遅れて来た中年」と言った感を持っていませんか。

平均寿命からすると後四半世紀、若者からターゲットにされる大人をどう演じて行くか、ご同輩「もうひと踏ん張り」がんばりましょう。

第七回卒

大岩の思い出

地学科　森　伸一

昨年一月、一九六六年四月入学化学・生物学科の同窓会が静岡市のルヴェルたちばなで開かれ二〇名ほどが参加した。翌日は大岩の静大跡地の公園に出かけた。昔の寮と校庭の境界付近にたち開学祭でトロイの木馬を作ったこと。大学祭の時グランドで模擬店を開いたこと、文理学部の階段教室やプレハブ校舎で授業をうけたこと。よくクラス討論をしたことなどたくさんの思い出が浮かんだが、当時の面影はひとつも残っていなかった。三年生になると校舎の一番北、大岩では唯一の鉄筋コンクリートの建物である理科館で授業実験をすることが多くなった。地学履修コースに進んだのは私と大橋君だけで、どちらかが休むと一人で授業を受けることもあった。当時地学の教官で一番若かったのは昨年退官された黒田直先生で年が近いこともあり、教育の地学の学生そして私たちと雑談する機会が多かった。あれからもう三〇数年の歳月が経ってしまった。光陰矢の如しである。

第二回卒

♪サイエンスアルムニコンサート♪

平成十三年十二月九日に、静岡音楽館ＡＯＩで理学部同窓会主催の「サイエンス・アルムニ・コンサート」を行いました。

我が理学部出身の才能溢れるピアニスト奈良康佑君と静岡交響楽団のメンバーによる演奏で、モーツアルトのピアノ四重奏曲第一番、プーランクの六重奏曲等のピアノ協奏曲の他、ショパンのバラード第四番ヘ短調、リストの愛の夢第三番等のピアノ独奏曲等の名演奏を会場を埋めた同窓生や理学部関係者に二時間余りにわたって心ゆくまで聴かせてくれました。

なお、コンサート終演後、同じ静岡駅前にあるブケ東海にて、同窓会懇親会を行いました。理学部長の天岸先生の他、多数の先生方が出席され、コンサートの出演者を交えて、同窓会員との懇親を深めることができました。

大学関係者との労をとってくれた和田君、出演の奈良君どうもご苦労さまでした。

（浅野記）

静岡大学同窓会 連絡協議会についての報告

平成十四年二月二十三日にパルシェ会議室で行われた。各同窓会の役員一一名と大学から佐藤博明学長が出席して行われた。

①幹事長人事

文理人文学部同窓会の会長の交代に伴い、幹事長を愛野明宣氏から鈴木基之氏に交代する。

事務代行は引き続き文理人文学部同窓会におんぶしていた。

④定例会を年二回、二月と八月の第四土曜日に行う。等の議事の後佐藤学長より最近の情勢が話された。

①行政法人化すると、意思決定機関に学外者が入る。

②浜松医大との統合は機関決定した。

③教育学部は存続する方針だが定員は減少する。など

（石渡記）

事務局より

平成十一年七月、総会で決定した事業案は、「①理学部が実施する講演会、同窓会の支部が実施する会合等に補助金を出す。②役員会計規定を整備する。③インターネットを使った会員との連絡の研究。④役員後継者の育成及び同窓生教官との交流。」でした。

平成十三年七月に、「理学部講演会」（主催　理学部・協賛　理学部同窓会）を二回実施しました。十一月に、「理学部教官の方々と同窓会役員の会合」を持ちました。十二月には、同窓生の奈良康佑氏を一年半ぶりに迎えて「サイエンスアルムニ・コンサート」を開催しました。彫刻家の田辺光彰氏に依頼したメタセコイアとヒマラヤスギの彫刻も進行しています。

大学改革が急速に進む中、静岡大学創立五十周年記念の余韻が残っていることを利用し、理学部同窓生の母校教官の協力も多々あって、「名簿の整理」と「会報の発行」以外にもたくさんの事業を実施できました。

これからは、静岡近辺在住以外の方々にも参加可能な事業を考えていかなければと思っております。

野口和廣